

neo

⚕ MEDICAL INFORMATION MAGAZINE ⚕

Summer
2025

#08



幸せな日々を医療と共に。

福井大学医学部附属病院
麻酔科蘇生科 教授

松木 悠佳

福井循環器病院

佐藤 小百合 / 多田 光代 /
向川 康太 / 三田村 亜希奈

福井大学医学部附属病院
呼吸器内科 教授

早稲田 優子

02

Doctor's Hand

福井大学医学部附属病院 麻酔科蘇生科
教授

松木 悠佳

12

Very Human

福井循環器病院

佐藤 小百合 / 多田 光代 / 向川 康太 / 三田村 亜希奈

20

Professor's Voice

福井大学医学部附属病院 呼吸器内科
教授

早稲田 優子

STAFF

Project Design 坂口 俊克
Writer 上乗 繁能 / 大廣 涼
Photographer 藤森 祐治
Designer 吉田 真人 / 西村 恭子
Cover Design 101%

発行/スギメディカル株式会社
〒101-0044
東京都千代田区鍛冶町一丁目7番6号
ヒルトップ神田ビル
TEL: 03-3518-5356 FAX: 03-3254-1339
E-mail: t.sakaguchi@project-ishin.net

SUPPORTING YOUR LIFE

新しい歩みを始めた日医工のミッションは、
SUPPORTING YOUR LIFE
「LIFE」には2つの意味が込められています。
人々の健康な人生を支え、
医薬品をつくる社員の人生にもよりそう。
それは、なぜか？
医薬品で人々の健康を支えるためには、
品質はもちろん、その安定供給に努める
日医工のガバナンスや社員が働く
環境を整える事が必要だからです。
コンプライアンスを遵守し、品質システムの改善を継続し、
社内外から信頼される企業風土を築き上げていく。
それこそが、新しい日医工のあるべき姿です。

日医工株式会社

MATSUKI YUKA

福井大学医学部附属病院 麻酔科蘇生科

松本 悠佳

ロボット麻酔システムを開発

その日、福井は午後から強い日差しが照りつけていた。平日の13時を回ると、福井大学医学部附属病院（以下、福井大学病院）の外来駐車場は、午前の混雑とは打って変わり、空きスペースが一気に増える。診療を終えた人や車が、足早に病院を離れていく。

正面玄関をくぐり、目の前のエスカレーターで2階に向かう。目的地は、2階A棟の北・南側24、25と表示された一角。ここに、手術部と集中治療部がある。

麻酔・蘇生科を率いる松本悠佳教授の仕事場だ。手術チームの一員として外科医や看護師など医療スタッフと手術を成功に導く。その一方、集中治療部の部長も兼任する。

ICU（集中治療室）の待機室に案内され、しばらく待つつもりでいたら「次の手術まで時間がありますから、今なら少しお話できますよ」

教授から直接、声をかけられた。手術を支え、術中の患者の命を預かる麻酔科医は、常に高い緊張感と責任感が求められる。張り詰めた面持ちで最初の質問を投げかけると、予想外の言葉が返ってきた。



MATSUKI YUKA

「教授になった感想？ んー、とくにないです」

今年4月、麻酔・蘇生科の第4代、教授に就任したばかり。麻酔科初の女性教授とあって、最初に聞いてみようと聞いた。だが拍子抜けするほど、本人に特別な感情はないようだ。それでも心境の変化がないか、再び聞いた。

「前任の教授と一緒に、研究からほぼ8年がかりで今のプロジェクトに関わってきたので、それを私が引き継いで前に進めるしかない。いまはそういう気持ちです」

松木教授が口にしたプロジェクトとは、麻酔科医の負担軽減などをめざして開発された「ロボット麻酔システム」だ。産学連携により2017年から研究開発に着手、2023年に製品化された。

鎮静、鎮痛、筋弛緩を制御

福井大学病院に限った話ではなく、全国的に麻酔科医が不足している病院は少なくない。松木教授は、自らが入局した2007年当時から、大学病院が慢性的な麻酔科不足に陥っている現状に危機感を覚えていた。手術が多い大学病院で麻酔科医が不足すると、一人にかかる負担は大きくなり、安全性

にも影響しかねない。

「患者さんの手術までの待機時間を減らし、安全に、比較的高品質の麻酔を提供するにはどうしたらいいか。前任の教授がずっと考えておられて、私も同じ思いでした」

課題だったのは、松木教授が指摘する手術までの患者の待機時間の削減や、手術に研修医が参加した場合の安全性の確保だった。そこで、手術中の全身麻酔の円滑な実施、麻酔科医の業務負担を軽減するにあたり、「機械を使ってベテランの麻酔科の先生に近い形で薬剤を投与できないか」と考え、麻酔投与の自動化に取り組むようになるのだ。

「麻酔投与の自動化は、私の大学時代の指導教官でもある長田理先生（現・麻酔・蘇生科准教授）が1990年代から取り組んでおられて、前任の教授とも顔見知りでした。そのご縁もあって、のちに福井大学病院に來られることになるのですが、先生がつくれたプログラムをもとに、メーカーである日本光電工業さんにも加わっていただき、実用化に向けた研究開発に取り組むようになったのです」

それからほぼ6年後に製品化にこぎつけるのだが、その道のは順風ではなかった。そもそも全身麻酔は、3要素である鎮静、鎮痛、筋弛緩の薬剤を、



専門医しか使えないようになっていた。もう一つは、手術対象が限られることだ。福井大学病院では、現状は婦人科、泌尿器科、耳鼻科、形成外科、消化器外科の患者で、大きな合併症が少ない、比較的安全に手術が行える人を対象にしている。

「治験などでは、P S 3レベルの重症例でも行っていて厚生労働省も認めています。学会はP S 2までです。脳や心臓系、血管系、小さな子どもの手術など時間がかかる手術には適しません。手がかかる手術は、私たち麻酔科医がしっかり対応するようにしています。自動麻酔システムは10年以上前から

ら研究を始めていますが、当時はまだA Iやロボットを使った自動化が進んでいませんでした。働き方改革についても同様です。いまようやく時代が追いついてきたところで、今後さらに適用が進むと考えています」

松木教授は、そう期待を込める。1号機の実績をもとに、松木教授の研究チームはすでに次の開発も進めている。手術時の全身麻酔で使用する、血圧を上げる昇圧薬と輸液を自動投与・調節する「循環制御用ロボット麻酔システム」だ。これを2号機と位置付け、2025年2月から医師主導治験を行い、実用化をめざしている。

システムを開発した松木教授の本来のねらいは「患者の待機時間の削減や医師の業務負担を減らし、待機中の手術を前倒ししたり、働き方改革などにつなげる」ことだ。その成果についてはどうなのか？

「手術中に、機械にある程度任せるところで、私たち麻酔科医は他の作業や患者さんの状態を監視することに時間を割けるようになりました。各薬剤のパラメータなど、麻酔に関するいろいろな要素を画面で確認できるようになったので、学生や研修医の教育ツールと

キラキラ輝いて働ける

順番にバランス良く投与することで成り立っている。ポイントになったのは、この3要素をうまく自動制御することが可能かどうかだった。松木教授が振り返る。

「私たちがめざしたのは、鎮痛薬、鎮静薬、筋弛緩薬を順番に注入し、手術中は患者さんの脳波や筋肉の動きをもとに、状態に合わせて薬を減らしたり、増やしたりするシステムでした。鎮静薬は、脳波を見ながら調整できますし、筋弛緩もモニターで数値を見ながらコントロールできるので、薬剤の投与は比較的簡単です。難しいのは鎮痛で、現状はモニターで制御できるようになっ

ていません。私たちは、患者さんの血圧と脈拍の情報を見ながらコントロールしていたのですが、それを自動化するためにどうしたらいいかが問題でした。結局、鎮静の数値を使って鎮痛を制御できないかをずっと研究していて、それがクリアになったことで製品化につなげることができたのです」

次の開発も進行中

こうして松木教授の研究開発チームは、鎮静薬、鎮痛薬、筋弛緩薬を自動で投与する「ロボット麻酔システム」の1号機を製品化し、2023年に薬

機法の承認を経て、販売される運びになるのだ。

ちなみにロボット麻酔システムを開発したのは、国内では福井大学病院が初めて。日本麻酔科学会はじめ海外の学会でも評価され、現在全国9県の大学病院など10施設で運営されている。システムを使用した症例も1000件を超えており、福井大学病院発の画期的なシステムとして熱い視線を集めている。

とはいえ、課題がないわけではない。一つは、このシステムを使用するための日本麻酔科学会が定める適正使用指針のハードルがあつて、現状は麻酔科





松木 悠佳（まつき・ゆか）
福井大学医学部附属病院 麻酔科蘇生科 教授

〔略歴〕
2005年 東京女子医科大学医学科卒業
福井大学医学部附属病院卒後臨床研修医
2007年 福井大学医学部附属病院麻酔・蘇生科入局
2010年 福井大学医学部麻酔・蘇生学領域 助教
2022年 福井大学医学部麻酔・蘇生学領域 講師
2025年 福井大学医学部麻酔・蘇生学領域 教授

して使えるようになったことも大きな
メリットだと思います」

福井大学病院は、今年4月から手術
件数を増やしている。可能にしたのは、
午後4時から8時までの「イブニング
枠」による手術だ。藤枝重治病院長は、
その成果について「手術は麻酔科の存
在が重要なので、ロボット麻酔システ
ムの稼働などによる患者さんの待機時
間の削減、先生方の負担の軽減などが
大きい」と、麻酔科の貢献度を理由に
上げる。まさに松木教授の狙い通りと
もいえるが、現場ではどう受け止めて
いるのか？

「正直、大変ではありました。麻酔科
医は、私もそうですけど、ママさん麻
酔科医が多いんです。イブニング枠以
外にも手術はあるので、人数がいれば
別ですが当直以外、夜遅くなる手術に
立ち会うのは難しいのが現状です。私
としては、当直できる人には頑張っ
ていただいて、日中の手術は機械など
をうまく使って私たちがしっかり守る。
朝9時から夕方5時まで、麻酔科医と
してキラキラ輝いて働ける。そんな医
局をめざしています」

ワークライフバランスを守り、麻酔
のプロとしてしっかり仕事をこなす。
松木教授は、麻酔科医の新しい働き方
の実現にチャレンジしているのだ。

新しい風が 新しい麻酔科をつくる

それにしても、入局した当時「崩壊
寸前」とまでいわれた麻酔科医局に新
風を吹き込み、日本で初めてロボット
麻酔システムを開発し、医師主導治験
やAMED（日本医療研究開発機構）
の支援を引き出すなど、その活躍ぶり
は目覚ましい。

その結果、麻酔科初の女性教授に上
り詰めるのだが、現場や大学で激務を
こなし、自宅に帰れば3人の子どもの
母として家庭もしっかり守る。並大抵
ではないことを、普通にやってのける。
しかし本人はいたって自然体、気負っ
た様子はない。そもそも医師、
それも麻酔科医をめざしたのはどうい
う理由からだろうか？

「リケジョ（理系女子）ですが、両親
は医療関係ではなく、医師志望ではあ
りません。最初の大学は早稲田の教育
学部数学科に行きました。2年ほど通
いましたが、どうも自分には合わない
と感じて。たまたま近くに東京女子医科
大学があって、真剣に勉強すればもし
かしら受かるかもしれない。そう思っ
たのです。親戚に開業医がいて、医療
の世界を知っていたこともきっかけに
なったのかもしれない」

結果は見事合格！ 早稲田大学を2
年で中退、医師の道へ。麻酔科を希望
したのは？

「初期研修でいろんな科を回って内科
医が好きになりました。将来的な潰し
も効くと思って、麻酔科の先生に相談
したら『麻酔科医も内科医みたいなも
のだよ』と言われて。それもそうかなと。
朝が早く、テキパキ仕事をこなすのも
肌に合っている気がしました」

福井で生まれ育った松木教授には、都
会の殺伐とした空気より、自然が豊か
な暮らしが性に合っていたようだ。そ
れで東京には残らず、福井大学病院の
麻酔科蘇生科に入局した。どんな人た
ちに期待するか、最後に聞いた。

「オベ室を守る。これは私たちにしか
できません。麻酔科医として活躍でき
るのはオベ室に限らず、痛みを和らげ
るペインクリニックや緩和医療もあり
ます。いずれにしても専門性を磨くに
は、まだマンパワーが足りません。だ
から是非、若い人たちに入局してほし
いのです。医学生はもちろん、ママさ
ん麻酔科医もウェルカム。新しく入局
した人たちと一緒に、新たな研究開発
を進めたいと思っています」

新しい風が、新しい麻酔科をつくる。
そんな熱気が、福井大学病院を動かし
ている。

ドラッグストア併設で 理想の開業を！

DCPソリューションの提供サービス

経営理念、診療方針の作成
開業までのスケジュール作成
開業地の選定、診療圏分析
事業計画の策定
融資の打診及び交渉
設計、内装業者紹介及びアドバイス
医療機器選定
税理士、公認会計士の紹介
広告相談
従業員募集、採用、教育の補助
開設手続き
開業後の経営支援、拡大展開
継承支援



DCPソリューションは
豊富な経験とネットワークを持つ
先生方のよきパートナーとして
開業支援サービスを提供しています。



0120-911-545

平日(土曜・日曜・祝日を除く)の9時00分～18時00分

拠点

- 関東エリア(本社) ●東京都千代田区鍛冶町一丁目7番6号
ヒルトップ神田ビル
- 中部エリア ●愛知県大府市横根町新江62番地の1
- 関西エリア ●大阪府大阪市淀川区宮原一丁目2番4号
新大阪第5ドイビル13階
- 北陸・長野エリア ●石川県金沢市藤江北4丁目280番地

開業の事例や
先生方の声が
ご覧頂けます



<https://dcp-sol.com/article/docvoice/>

Fukui Cardio Vascular Center

Very Human

“心臓”に特化した
先進的な医療現場を
ハートフルな看護で
サポート。

命にかかわる責任感を胸に
スタッフ200人が活躍中

ここ北陸で福井循環器病院は、確かな地歩を固めている。「福井の地で心臓手術を」の願いを込め、心臓外科の世界的権威で東京女子医科大学教授を務めた故榊原氏氏がふるさとに循環器専門病院を開院してから58年、心臓外科の開心術やカテーテルによる血管内治療など心臓病に対する治療を実践してきた。また、近年では、心臓領域で最先端の医療を次々と取り入れており、内科領域においては、開胸することなく人工弁を入れる経カテーテル大動脈留置術(TAVI)であり、外科領域では、内視鏡を用いて外科手術を受ける患者の負担を軽減する低侵襲心臓外科手術(MICS)である。

その中の一つに、福井県で循環器病院のみが診療を提供することができる補助人工心臓(VAD)の植え込みがある。福井循環器病院はVADの植え込み手術の実施だけでなく、大阪大学医学部附属病院と連携することで、VAD植込み後に心臓移植などに移行するためのフォローアップにも力を入れている。また、福井県内での小児の先天性心疾患の外科治療の実施について

福井循環器病院

も福井循環器病院に限られる。福井循環器病院には赤ちゃんからお年寄りまで「心臓」にかかわる広い領域のスペシャリストが集まっており、県内における心臓病治療の最後の砦といっても過言ではない。

そんな地域に不可欠な医療機関を支える屋台骨の一つが、200人近くのスタッフを抱える看護グループである。グループは佐藤小百合副院長をトップに、多田光代グループマネージャー（GM）が組織を牽引。佐藤副院長は、「私たち看護グループの理念は、『患者様の人權を守り、安全性を考慮した質の高い看護をめざす』ことです。命に直結する心臓にかかわる循環器専門病院の看護師として、全スタッフが一丸となって医療に携わっています」と、言葉に力を込める。

多職種や看護補助者も含めたチーム医療で

福井循環器病院で看護グループの活躍するフィールドは多岐にわたる。病棟は3・4・5階それぞれにあり、救命センターや手術室、外来でも多くの看護師がスキルを発揮している。

加えて、看護グループに所属する専門職は看護師だけではない。「福井循

り、この病院での経験をフルに生かせる環境をつくりたかったのです」。佐藤副院長は、新たなチーム制導入の狙いを、こう教えてくれた。

ほかにも、看護グループで年に1度、業務改善活動を報告する機会を設け、優秀者は全国TQM大会で発表している。多田GMによると、「多職種連携チームによる業務改善委員会も開催しています」とのこと、病院を挙げてよりよい職場づくりに知恵を絞っている。

「赤ちゃん」の自立をファミリーで後押し

「循環器に特化した病院で働くとなると、高い専門性が求められ、苦手意識を抱く人も少なくありません。そこで、看護グループでは、循環器領域の経験がない看護師でも、学校を卒業したばかりの新人でも、無理なくスキルアップできる人材育成に努めています」。佐藤副院長はこう話し、ラダー教育とエキスパート教育を人材育成の柱に据える。

ラダー教育は卒後教育の一つであり、新人として入職してから管理職としてマネジメントする立場になるまで、一人ひとりのレベルに合わせた多

循環器病院は、医療ソーシャルワーカーが数多く在籍しています。看護グループの地域連携室に所属しており、病棟

看護師と連携し患者さまの退院支援などに取り組んでいます」と多田GM。看護グループ内でも多職がタッグを組



看護師 三田村 亜希奈



看護師 向川 康太



グループマネージャー 多田 光代



副院長 佐藤 小百合

むことで、退院後のケアなどにも注力している。

また、看護補助者も欠かせない戦力だ。看護師との協働体制が確立されており、夜勤は看護補助者も加わった4人体制が基本となっている。一方で、看護補助者は時間外勤務がなく、安心して働ける環境づくりも確保されている。職種や立場に関係なく、看護グループ全体で働き方改革の実現に取り組んでいる。

また、労働人口が減少する中、より効率よく、質の高い看護体制を実現するべく、3年前に導入したのが、「アメンバー・ナッシング・システム」だ。以前は、急性期や慢性期など、患者の状態に応じて固定したチームを組んでいた。しかし、病棟は東西に長く、固定チーム制では担当患者がいる病室に合わせて院内を行ったり来たりすることが多かったという。そこで、看護スタッフが減っても質の高い看護を提供できるよう、病室の配置に基づく担当エリアに応じて、看護師のチームを編成し直した。この改善によって動線のムダがなくなり、効率的な看護が可能になったという。

「循環器病院で働くなら急性期も慢性期も体験してほしいと考えています。チームは違っても病棟は一つであ

内認定看護師として認められ、より一層のキャリアアップを目指す看護師向けのサポート体制も充実している。また、院外での研修や学会に出かける際は、病院からの支援も実施されている。

人材教育としては、ファミリー方式も大きな特色だ。これは福井循環器病院オリジナルの取り組みで、チームを一つの家族に見立て、新人を「赤ちゃん」とし、先輩・上司が姉や兄、母、父、祖母となる。指導をプリセプター（先輩看護師）一人に任せるのではなく、家族みんなで力を合わせ、新人が自立するまでをきめ細かくバックアップするのが狙いだ。

このファミリー方式に象徴されるように、中小病院ならではの顔が見えるアットホームな雰囲気も、福井循環器病院の魅力といえるだろう。

また、看護グループ主催の親睦会を開催しており、休日を利用してかまぼこ作りやハーバリウム製作など、さまざまな体験イベントを企画。所属や年齢などの垣根を越えてグループ全体の交流を深めており、チームワークのよさが日ごろの看護にも生かされているようだ。

彩な研修を採り入れている。対して、エキスパート教育は、循環器領域に特化した研修内容が特徴だ。たとえば、

「心不全育成ナース」「VAD認定看護師」などの院内認定研修を修了すれば、専門分野の知識・技術を身につけた院



育休取得率100% 働きやすい環境も魅力

実際に働いている看護師の声にも耳を傾けてみよう。救命センターで働く向川康太さんは、専門領域のスキルを磨きたいと、大学卒業後、福井循環器病院への就職を決めた。ただ、意気込みはあったものの、最初はとまどいの連続だった。「何から勉強したらいいかさえもわかりませんでした。それでも、先輩に教えてもらい、周囲の皆さんに必死でくっついていきました。本当に無我夢中。気がついたら、あっという間に1年が経っていて、そのときには、新人の頃とは比べようもないほどの成長を感じました」と話す。

外来で働く三田村亜希奈さんは県外の大学卒業後、大阪の大病院に勤務していたが、結婚・出産を機に地元福井に戻り、2010年から福井循環器病院で働いている。「通勤のしやすさから選んだのですが、大学病院時代は心電図を扱った経験がなく、ここでは初めてのことがばっかり。それでも、先輩や上司の皆さんが温かく接してくれたおかげで、スムーズに仕事を覚えることができました」と教えてくれた。循環器領域に特化した専門性の高さに、難しさを感じながらも、周囲の助

けも借りながら仕事と向き合ってきた。そんな二人は、プライベートとの両立のしやすさにも太鼓判を押す。

「看護グループの育休取得率は100%で、私も子どもが産まれた際に取らせてもらいました」と向川さん。男性看護師も数カ月単位で育休を取っており、子育てにも積極的にかかわっている。「子どもが小さいときに利用できる育短制度は、1日の勤務時間を短くするか、休日を月に2日増やすかを選択できます。私は休みを増やして、家族とのふれあいの時間がリフレッシュになっていきます」（向川）。「私も育短制度を利用し、3人を育てています。振り返ってみても、子どもと過ごす時間を確保できたことは本当によかったです」と、三田村さんも病院の育児サポートの手厚さに同意する。加えて、最近はいずれも驚きもあったそうだ。「小学6年生と3年生の娘が、夜勤に出かける私に代わってカレーライスやしょうが焼きを作ってくれるようになった。二人とも将来は、『看護師になりたい!』と話しているんですよ」（三田村）

福井循環器病院は福利厚生制度も充実しており、年間休日は125日あり、有給取得率も高い。ワークライフバランスをとりながら働く先輩たちの

姿が、これから看護の世界でキャリアアップをめざす人たちのロールモデルとなることだろう。

一人ひとりに合った 看護の道を歩める環境

もちろん、向川さんも三田村さんもまだまだ成長途中だ。「救急救命の現場では、ほんの少し目を離しただけで患者さんの容態は急変します。1秒を争う中で少しでも戦力になれるよう、クリティカルケア認定看護師の資格取得を目指しています」（向川）。「私は病院の後押しを受け、心不全療養指導士資格を取得しました。心不全を患う患者さんが安心して生活できるよう、これからもサポートしていきたい。そのために、患者さんごとのサマリーを作って情報共有するなど、在宅医療やデイサービスなどで働く看護師との連携を深めていきたいと考えています」（三田村）

彼・彼女のように、福井循環器病院には、それぞれが思い描く看護師の道を歩んでいける環境が整っている。多田GMは、「自分がどんな看護師になりたいかをぜひイメージしてください」と、新人看護師やこれから看護の道に踏み出す若者たちにエールを送

る。同時に、「自分への優しさも忘れないでください。できないことへの悔しさから、自身を厳しく追い込み過ぎるのもよくありません。患者さんや友達への優しさを自分にも向けて、あせらずに進んでほしいと思います」と、看護師の先輩としてのアドバイスも寄せてくれた。

佐藤副院長も、自身の経験を振り返りながら、ビジョンを語る。「私もいろいろな病院で、さまざまな診療科を経験してきました。看護師として歩んでいく道は、それぞれ違っていて構いませんし、それが当然です。専門性を追求する人もいれば、家庭との両立を第一に考える人もいます。いろいろな想いを抱く看護師一人ひとりが輝ける病院をつくらしていきたい」

地域のニーズに応えながら進化し続ける福井循環器病院。看護学生のインターンシップや看護実習も積極的に受け付けており、学生や看護学科への進学を考える高校生向けに、教室の開催にも力を注ぐ。次代を担う人材の育成に心を砕いており、循環器領域の地平を切り拓いてきたその視線は、20年後、30年後の地域医療の未来を見据えている。

想いを伝える、

変わりゆく時代に 新しい医療を

この度、第8号を発刊することができました。
取材に協力していただきました医療者の方、
協賛して頂きました企業様におかれましては
心より感謝申し上げます。
今後とも末永くご支援の程よろしくお願い申し上げます。

これからもわたしたちは、はたらく医療者の姿を、
地域の医療界全体へ発信してまいります。

協賛社募集

私たちは「医療情報誌 neo」の活動に
ご賛同いただけるスポンサーを募っています。

neo
✧ MEDICAL INFORMATION MAGAZINE ✧

力を貸してください。

組織・地域を越えた
“つながり”で
格差のない
呼吸器疾患診療を

早期発見・早期治療へ
待ちではなく、「出向く」

取材に訪れたのは、教授就任から3ヶ月がたったころだった。そろそろ環境の変化にも慣れ、落ち着いてきた頃合いかと思いきや、忙しい日々はまだまだ続いているようだ。

「昨日は大阪で講演会があり、先週は岐阜に行っていました。今朝は4時に起きて始発で福井に戻り、午前中は外来を担当。加えて、若い医師をいかに指導していくか、スタッフを増やすにはどうすればいいか、診療科のこれからも考えていかなければなりません。いまだに『教授』と呼ばれることに、多少の違和感がありますが、立場はがらりと変わりました（笑）」

講師から呼吸器内科を牽引する教授へ。その責任感の違いをひしひしと感じている。と同時に、県内唯一の特定機能病院である福井大学医学部附属病院の教授として、地域全体の呼吸器疾患診療を見据えた取り組みにも力を注ぐ。その一つが、早稲田教授が音頭を取ってスタートさせた「FIND-AIR」だ。FIND-AIRは、Fukui Identification of Non-Diagnosed Asthma and Interstitial lung diseases in Respiratory patients の頭文字をつなげたもので、県内の基幹病院と連携し、若手の医師や学生、薬剤師などで結成する組織で、

#University of Fukui Hospital

YUKO
WASEDA

#Division of Respiratory Medicine

Professor's Voice

早稲田 優子



呼吸器疾患の診療にかかわる格差の是正を目的としている。

「残念ながら、県内には呼吸器内科医が多くありません。見方を変えれば、十分な診療を受けられない地域が生じやすい状態にあるともいえます」

早稲田教授はこう指摘し、医療機関の垣根を越えたスクラムを組む重要性を訴えており、FIND-AIRの活動として、若手の医療スタッフが県内各地で十分な診断や治療をされていない気管支喘息や間質性肺疾患などの呼吸器疾患に関する啓発活動を進めていく計画だ。患者が来院するのを「待つ」のではなく、医師自ら「出向く」ことで、疾患の早期発見・早期治療につなげていく。

間質性肺疾患の診療に注力 集学的検討（MDD）推進

このように早稲田教授の横顔を探るとき、「つながり」は一つのキーワードとなる。それは、教授の専門とする間質性肺疾患の診療においても同じだ。間質性肺疾患は、肺の間質と呼ばれる部位に炎症が起きる病気の総称であり、2023年の統計では国内の死因の11位となっている。昨年2月には、歌手の八代亜紀さんもこの病気によって命を落とした。

高齢化社会の進行に伴って今後も増加が

予想される疾患だが、その原因を特定するのは簡単ではない。アレルギー反応や膠原病が起因となっている場合もあれば、抗がん剤や抗生物質などの薬剤で発症するケースもある。いまの医学では解明できない特発性の間質性肺疾患も少なくない。とはいえ、正確に診断し、適切な治療をいち早く始めることがカギとなるのは、他の疾患と同様だ。

そこで、福井大学医学部附属病院呼吸器内科で2020年から導入したのが、集学的検討「MDD（multidisciplinary discussion）」である。MDDとは、呼吸器内科医だけでなく、放射線科医や病理医など各分野のエキスパートが集まって協議し、疾患の進行パターンを考慮しながら最終的な診断と治療方針を決定すること。ただ、MDDは国際的に推奨されているものの、専門性を持った医師不足などを背景に、取り入れている医療機関は国内全体を見ても数が限られている。そんな中、同病院では診察結果を匿名でデータ化し、全国の専門医とオンラインで結び、画像や数値結果をもとにディスカッションする時間を設定している。

「このスタイルで進めている医療機関は、北陸では私たちだけです。正しい診断、正しい治療は患者さんの予後に直結します。これからも多方面の先生方のお力を借りながら、間質性肺疾患の治療効果を高めてい

X線TV撮影室 Fluoroscopy Room





きたい」と話す早稲田教授。福井大学発の先進事例の一つとして、今ではMDDの導入を検討する医師も全国各地からディスカッションに数多く参加しているという。高精度な画像を瞬時にやりとりできる情報技術を活用した医療格差是正の好例といえるだろう。

呼吸器内科では、院内のさまざまな診療科や多職種との連携も活発だ。その背景として、免疫療法や抗体療法、生物学的製剤など、従来とは異なる作用をもたらす薬の服用が進んでいる点が挙げられる。治療効果が期待される半面、薬剤性肺障害も増加傾向にあり、呼吸器内科医としてリスクを踏まえた管理も重要なミッションの一つだ。さらに、早稲田教授は、看護師や薬剤師、リハビリ部門のスタッフとともに間質性肺疾患に関するチームを結成。それぞれの立場から忌憚なく意見を交わしながら、患者中心の治療に心を砕いている。

AIによる画像診断で肺の繊維化を予見

先進的な医療技術を活用した診療も、呼吸器内科の大きな特色だ。とりわけ、気管支内視鏡システムは充実しており、極細径気管支鏡や仮想気管支鏡、超音波気管支鏡などがそろい、症例に合わせて適切なデバイスを使い分けている。内視鏡を使って接

触した組織を凍結させることで、大きな検体を取取できる「クライオバイオプシー」も行い、原因特定が困難な間質性肺疾患の正確な診断に役立てている。

早稲田教授も最新技術を利用した研究に情熱を注ぐ。肺に影がみられた際、気管支鏡を用いて生理食塩水を肺胞内に注入し、回収した液を分析する「肺胞洗浄液検査（BAL）」を実施することがある。液中の細胞成分などを分析することで、間質性肺疾患の病態を明らかにするためだ。2022年に呼吸器内科同門である、はるひ呼吸器病院病院長、齊藤雄二先生と当時福井大学医学部長（現病院長）の藤枝重治先生のお力添えにより「難治性呼吸器疾患診断・治療学講座」を立ち上げて頂き、この診断にAIを活用する研究を進めている。

「液をプレパラートに貼り付け、AIが画像から極めて微細な色や形の違いなどを読み取ることで、人の目では判別できない病変を明らかにするのが目的です。今はデータを収集し、AIに学習させて精度を高めている段階で、将来的には肺の繊維化がどのように進行していくかを見極め、患者さんに合わせた治療法の確立に結び付けていきたいと考えています」

このほかにも、早稲田教授は、肺が繊維化するマウスを使い、悪化を招く因子を突き止める研究にも取り組んでいる。また、呼吸器内科では、間質性肺疾患にとどまら

ず、喘息や慢性咳嗽^{がいそく}など、さまざまな呼吸器系疾患で治療にも積極的に取り組んでいる。

「治療というと研究の意味合いを強く感じるかもしれませんが。ただ、薬のない難病に悩んでいたり、何をしても改善が見られなかったりと、苦しんでいる患者さんがたくさんいます。そんな人たちに新たな選択肢を示すことは、大学病院として必要なことだと思っています」

早稲田教授はこう言葉に力を込め、患者が自分自身で納得した治療を受けられる医療環境の構築に全力を傾けている。

医局員と面談を実施 だれもが働きやすい環境へ

早稲田教授は院内にも優しい目を向け、呼吸器内科のスタッフが働きやすい職場づくりにも知恵を絞る。

「かつては、医師としてキャリアを積みむには、家庭を顧みることなく、仕事に打ち込むのが当たり前という風潮がありました。それはもう過去の話です。プライベートを楽しみながら、仕事でも業績を上げられる環境を整えていかなければなりません」

早稲田教授はこう話し、ワークライフバランスの充実を目的に、4月以降、医局員との面談をスタートさせた。金沢大学附属

病院勤務やウィーン医科大学への留学などを経て、2017年から福井大学に籍を置いてきたが、実際に1対1で話をする中でスタッフの新たな一面に気づくことも多いという。

そんな中、改善の必要性を感じているのが、子育てとの両立に關してである。早稲田教授自身、夫が16年より福岡大学で専任赴任の中、お子さんを育てながら、医師としてのキャリアを重ねてきた。福井大学勤務が始まった17年から息子が県外の大学に巣立つまでの7年間は、自宅のある金沢から毎日通いながら育児と仕事の両立を続けてきた。

「何もかも、私一人の力でできたわけではありません。家族にもたくさん助けてもらいました。とくに、義母には本当にお世話になりました。呼吸器内科は女性の医師が多く、男性も含めて子育て中のスタッフが多くいます。それぞれの育て方があるので一概にはいえませんが、これまでの経験を生かして少しでもお手伝いできればと思います」

こう語る早稲田教授は、医局員との話し合いの中で、それぞれの直面する問題の解決策を模索していく方針だ。さらに、大胆な秘策も教えてくれた。

「実は教授室にベビーベッドを置こうかと本気で悩んでいます（笑）。夫も単身赴任中で、息子が大学生になって家を出てか

らは福井で暮らしています。フットワーク軽く動けますから、後輩が子どもを連れてきてくれたら、少しの間、遊んだり、一緒に散歩したりもできますよ」と早稲田教授は笑顔を見せる。

患者と向き合い、 自信を持って診療を

患者であれ、先輩や仲間であれ、早稲田教授は、人と向き合う中で医師としての道のりを歩んできたといえるだろう。そもそも、医師を目指したきっかけも、心のケアを担う精神科医や心療内科医を志したことだった。そんな思いを胸に、金沢大学医学部卒業後は、当時心療内科があった第三内科を希望した。「ただ、入局したときには、残念ながら心療内科がなくなっていました」（早稲田教授）とのことだが、若手として無我夢中で走り続ける中で、内科医として日常的な臨床の現場でも心のケアは十分にできると感じたという。

そんな早稲田教授にとって、忘れられないエピソードがある。入局5年目、20代の女性患者を担当することになった。彼女は白血病で骨髓移植を受けたが、閉塞性細気管支炎を併発。いろいろな治療を試みるも改善は見られず、結果的に人工呼吸器をつけることになった。「助かる可能性は肺移植しかない」。早稲田教授は、国内で肺移

植ができる医療機関を次々とあたったが、白血病がネックとなり、好感触を得られたところは一つもなかった。それでも何とか食いがる中で、肺移植の道を切り拓いた伊達洋至教授（当時岡山大学）が「熱意に負けた」と受け入れてくれた。

「このままでは亡くなってしまう。そう感じていた彼女が元気に、自分の足で歩いて帰って来たときには本当にうれしかった。以来、伊達先生には目をかけていただきました。医師人生を振り返ると、恩師・先輩・後輩を含め人との出会いに本当に恵まれました。福井大学との縁も深く、内木宏延学長や名誉教授の伊藤春海先生にも若いころからお世話になっており、前教授の石塚全先生に声をかけていただいたことがいまにつながっています」

早稲田教授はそんな経験を踏まえ、若手医師にメッセージを送る。

「人と向き合うことを大切にしてほしい。診療の現場では、できるだけ患者さんを訪ね、いろんな話をしてほしいと思います。

『この人のことを一番知っているのは自分だ』と胸を張れるのが主治医です。そんな自信を持って、ほかの先生や多職種と連携しながら、患者さんにとって最善の診療にあたってください」

どれだけ医療技術が進化しても変わらない。早稲田教授は、AI時代にふさわしい、心の通った診療を追い続けている。

早稲田 優子（わせだ・ゆうこ）
福井大学医学部附属病院 呼吸器内科 教授

〔略歴〕
平成11年 金沢大学医学部医学科 卒業
金沢大学第三内科 入局
平成12年～17年 呼吸器内科医として金沢大学附属病院、関連病院で勤務
平成18年～24年 金沢大学附属病院呼吸器内科 医員
平成20年 金沢大学医学系研究域大学院（博士課程）卒業
平成24年～26年 金沢大学医薬保健研究域呼吸器内科 助教
平成26年～27年 Department of Biomedical Imaging and Image-guided Therapy, Medical University of Vienna, Observer and Researcher
平成27年～29年 独立行政法人地域医療機能推進機構金沢病院 内科診療部長
平成29年～令和3年 福井大学医学系部門内科学(3) 分野 助教
令和3年～6年 福井大学医学系部門内科学(3) 分野 講師
令和6年～7年 福井大学医学系部門呼吸器内科学分野 講師
令和7年～ 福井大学医学系部門呼吸器内科学分野 教授



医療を支える。 人と地域の未来のために。

私たちが幸せな人生を歩むために、医療は、必要不可欠です。

しかし、世の中の変化とともに、医療は今、多くの課題を抱えています。

医療人材の採用から育成、キャリア支援、仕組み作りまで

私たち MCS は、HR（ヒューマンリソース）の分野で、医療の課題解決に向き合います。

医療関係者、生活者、地域社会、その未来のために。



「地域」と「医療」の架け橋として ヒューマンリソースの問題をトータルで支援する

スギ薬局グループ



詳しくはWEBへ



neo
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

福井県内で活躍する医療従事者に焦点を当てた地域密着医療情報誌として、県内の医療機関へ3カ月に一度配布しております。

最先端医療から地域医療、また人々の暮らしに寄り添うクリニック、在宅医療・福祉など幅広い分野を取り上げております。

この雑誌が福井県内の医療者と医療者を結ぶひとつの情報ツールとなり、福井県の医療活性化に少しでもお役に立てることを目的としております。

バックナンバー紹介



#07 心安らぐ日々を医療と共に。

Doctor's Hand

医療を変える情熱をもつ。

福井大学医学部附属病院 呼吸器外科 科長・准教授・診療教授
佐々木 正人

Medical LANDSCAPE

生きる力を後押しする。

特定医療法人さくら千寿会 さくら病院 院長
片山 寛次

Reliable Doctor's

足の外科に強みを持つ整形外科 笑顔で地域を明るくつつむ

さくら通り整形外科クリニック 院長
宇賀治 修平

Very Human

患者さんと、仲間への“思いやり”を胸に、
出産から在宅医療まで地域のくらしを支える。

坂井市立三国病院 看護部
川端 真由美 / 篠崎 瑛子 / 濱口 忍



